

古サルデーニャ語の語末添加母音について

金澤 雄介

(京都大学大学院文学研究科)

要 旨

本研究では、古サルデーニャ語における、子音で終わる語が文末に置かれるときに付加される語末添加母音の性質について考察する。考察においては、語末添加母音の音色や、語末添加母音に先行する母音の消失の有無などに基づき、古サルデーニャ語には通時的規則によって付加されていると解釈できる語末添加母音があることを明らかにする。同時に、共時的規則によって付加される現代サルデーニャ語の語末添加母音とは異なる性質を持つことを主張する。加えて、語末添加母音が付加された語尾が類推によって別の語尾に一般化されている事例を挙げ、語末添加母音が語尾の一部に統合されていることを示す。

1. はじめに

サルデーニャ語は、イタリアのサルデーニャ島で話されるロマンス諸語の 1 つである。話者はおよそ 150 万人であり、そのほとんどはイタリア語との二言語使用者である (金澤 2009: 424-426)。サルデーニャ語には大別して 2 つの方言が存在する。サルデーニャ島の中央部および北部で話されるログドーロ方言 (logudorese) と、島の南端に位置する州都カリアリ (Cagliari) を中心としたカンピダーノ平野で話されるカンピダーノ方言 (campidanese) である (地図参照)¹。

現代サルデーニャ語では、子音で終わる語が文末に来る場合、語末添加母音が付加される。一方古サルデーニャ語²の語末添加母音には、現代サルデーニャ語には見られない特徴が観察される。本研究では、古サルデーニャ語における語末添加母音の性質について、カンピダーノ方言で書かれた文献である *Carte Volgari* に実際に現れる語形に基づいて考察する³。結論として、古サルデーニャ語における、子音で終わる語に付加される語末添加母音には、通時的規則によって付加されていると解釈できるものがあることを示し、それら

¹ サルデーニャ島の北東部に位置するガッルーラ地方ではガッルーラ方言 (gallurese) が、島の北西部ではサッサリ方言 (sassarese) が話されている。これらの方言はいずれもイタリア語との接触によって生じたものである。従って Blasco Ferrer (1984: 186) や Wagner (1943) などは、ガッルーラ方言とサッサリ方言はサルデーニャ語の方言ではなく、イタリア語の方言として扱われるのが妥当であるとしている。

² 古サルデーニャ語とは、Giudicato (脚注 9 参照) がサルデーニャ島を統治していた 11 世紀から 14 世紀頃のサルデーニャ語を指す (Blasco Ferrer 1984: 64)。

³ ログドーロ方言で書かれた古サルデーニャ語文献では語末添加母音が表記されていない。従って本研究ではカンピダーノ方言で書かれた古サルデーニャ語文献に現れる語形のみを考察の対象とする。

は共時的規則によって付加される現代サルデーニャ語の語末添加母音とは異なる性質を持つと主張する。

2. 考察に向けての前提知識の導入

本章では、本稿における考察に必要な前提知識について述べる。

2.1. 研究の背景

現代サルデーニャ語の語末添加母音に関する研究には、Virdis (1978), Wagner (1984) などがある。また *Carte Volgari* すなわち古カンピダーノ方言に見られる語末添加母音については Guarnerio (1906) に言及がある。しかしながら、いずれの研究も共時的な観察のレベルにとどまっており、本稿で行なうような、通時的観点を取り入れた語末添加母音の考察には及んでいない。

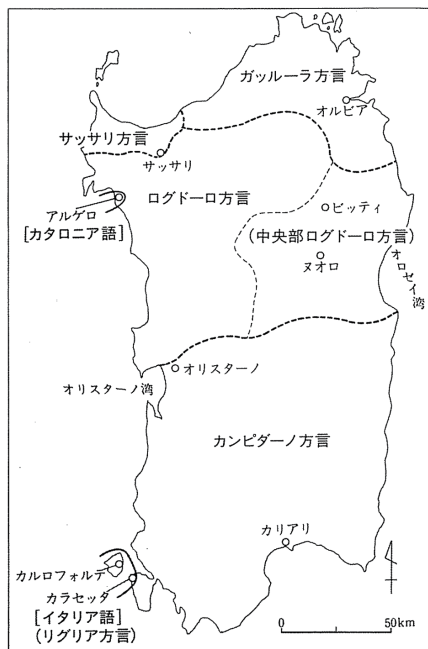


図 1:サルデーニャ語方言分布図 (長神 1998: 105)

2.2. 語末添加母音の基本的性質

本節では先行研究に基づき、サルデーニャ語の語末添加母音の基本的性質について概観する。サルデーニャ語において語末添加母音は、以下に示す 2 つの場合に付加される。

2.2.1. 単音節語および語末音節アクセント語に付加される語末添加母音

ラテン語において単音節語、あるいは語末音節アクセント語であった形式には語末添加母音が付加される (Virdis 1978: 22, 39, Wagner 1984: 25-28)。この場合の添加母音の音色は、一般的にカンピダーノ方言では *i*、ログドローロ方言では *e* となる。以下にいくつかの例を示す⁴。

camp. *immói* ‘now’ < ECCU MO(DO)

log. *míe* ‘me’ < **mí* < MIHI

log. *túe*, camp. *túi* ‘you’ < TŪ

⁴ サルデーニャ語には正書法が存在しない。従って現代サルデーニャ語の形式は音声表記で示す。またラテン語の形式はスモールキャピタルで示す。なお本稿では、サルデーニャ語に対応するラテン語の形式については Atzori (1953) および Wagner (1960-1964) を参照した。

Wagner (1984: 25) によると、サルデーニャ語には語末音節アクセントを避けるという性質があるため、このような語末添加母音が付加されるという。なお、カンピダーノ方言の語末添加母音 *i* は語末音節高母音化によって *e* が変化したものであると考えられる。語末音節高母音化とはカンピダーノ方言にのみ見られる変化で、語末音節のアクセントのない *e*, *o* がそれぞれ *i*, *u* になるという現象である。Viridis (1978: 34-35) に基づき、以下に具体例を示す⁵。

| log. | camp. | | lat. |
|-----------|-----------|----------|--------|
| déō | éu | ‘I’ | EGŌ |
| fidzoz[o] | filluz[u] | ‘sons’ | FILĪŌS |
| fróre | fróri | ‘flower’ | FLŌREM |
| káne[z] | kániz[i] | ‘dogs’ | CANĒS |

語末音節高母音化は、古カンピダーノ方言でも観察される (Viridis 1978: 35)⁶。

berbeis (CV: 2ii, 13) ‘sheep’ < VERVĒCES

parti (CV: 2, 3, 4 ecc.) ‘part’ < PARTEM

potestandu (CV: 1, 3, 4 ecc.) ‘governer’ < POTESTANDŌ

serbus (CV: 4, 5, 6 ecc.) ‘slaves’ < SERVŌS

2.2.2. 子音で終わる語に付加される語末添加母音

子音で終わる語が文末に来る場合、語末添加母音が付加される (Wagner 1984: 101-108)。子音で終わる語における語末添加母音は、ログドーロ方言では直前の音節の母音と同じ音色になる。一方カンピダーノ方言では前節で見た語末音節高母音化によって、語末添加母音 *e* と *o* はそれぞれ *i* と *u* になる。従ってカンピダーノ方言では、直前の音節の母音が *i* と *e* の場合は *i* が、*u* と *o* の場合は *u* が、そして *a* の場合は *a* が付加される (Viridis 1978: 40)⁷。また語末添加母音の付加によって子音は母音間に位置することになるが、この子音が阻害音の場合、弱化が生じる。以下に具体例を示す⁸。

| log. | camp. | | lat. |
|-----------|------------|----------------------|----------|
| sámben[e] | sánguín[i] | ‘blood’ | SANGUEN |
| Ést[e] | ést[i] | ‘be’ (IND.PRES.3SG.) | EST |
| báttor[o] | kuáttur[u] | ‘4’ | QUATTUOR |

⁵ [] 内に示した語末添加母音については、次節で述べる。

⁶ 以下、古サルデーニャ語のそれぞれの形式の後の () 内に示した数字は、*Carte Volgari* でその形式が現れる節番号を示す。ローマ数字は同一節内に現れる回数を示す。

⁷ 単音節語でかつ子音で終わる語では、3.1. で示すように語末添加母音は義務的に付加されるが、音色については子音で終わる語の添加母音の規則に従う : log. kóro, camp. kóru ‘heart’ < COR.

⁸ 本稿では子音で終わる語に付加される語末添加母音は [] で括って示す。

| | | | |
|-----------|-----------|------------------------|--------|
| kántað[a] | kántað[a] | ‘sing’ (IND.PRES.3SG.) | CANTAT |
| kráz[a] | kráz[a] | ‘tomorrow’ | CRĀS |
| kántaz[a] | kántaz[a] | ‘sing’ (IND.PRES.2SG.) | CANTĀS |

一方、子音で終わる語に別の語が後続する場合は語末添加母音は付加されず、別の現象が見られる。すなわち、子音で始まる語が後続する場合、語末子音は後続語の初頭子音に同化する。また、母音で始まる語が後続することによって語末阻害音が母音間に位置する場合、添加母音が付加された時と同様、弱化が生じる。以下に現代カンピダーノ方言の例を示す。

/trés lítros/ [tré lítrozu] ‘three liter’
 /tórrat krás/ [tórra kkráza] ‘return (IND.PRES.3SG.) tomorrow’
 /bólit andái/ [bólíð andái] ‘want (IND.PRES.3SG.) go (INF.)’
 /kántas ói/ [kántaz ói] ‘sing (IND.PRES.2SG.) today’

上に示した事実から、子音で終わる語における語末添加母音は、後続語の有無によって条件付けられていることがわかる。すなわち、子音で終わる語における語末添加母音は現代サルデーニャ語話者の文法に存在する、共時的な規則によって付加されているといえる。

2.3. *Carte Volgari* について

Carte Volgari (以下 CV) は、カリアリ国⁹の歴代の王 (Giudice) からカリアリ大司教 (Arcivescovado di Cagliari), あるいはカリアリ北部に存在したスエツリ司教 (Vescovado di Suelli) に対する財産、土地などの寄進を記録した文書の総称である。1070 年から 1226 年にかけての文書が残存しており、計 21 編からなる。Solmi (1905) によると、それぞれのテキストが書かれた年代は以下の通りである：1: 1070-1080 年, 2: 1114-1120 年, 3: 1114-1120 年, 4: 1121-1129 年, 5: 1130 年頃, 6: 1130 年頃, 7: 1140 年頃, 8: 1150 年頃, 9: 1200-1212 年, 10: 1200-1212 年, 11: 1215 年, 12: 1215 年, 13: 1215 年, 14: 1215 年, 15: 1216 年, 16: 1217 年, 17: 1217 年, 18: 1217 年, 19: 1225 年, 20: 1226 年, 21: 1226 年。本稿では CV のテキストとして、Solmi (1905) を使用する。

CV を構成する 21 編のうち 16 編はオリジナルが残されている。一方残りの 5 編、すなわちテキスト番号 1, 7, 15, 20, 21 は、15 世紀以降の写本のみが現存している。

CV における文字 (綴り) と音の対応については、ラテン語やロマンス諸語におけるそれとほぼ同様である。注意すべき対応は以下の通りである：<ç, z> = /ts/, <gi, ge> = /dʒi, dʒe/, 母音間の <b, d, g> = [β, ð, ɣ]¹⁰。

⁹ 中世サルデーニャには、Giudicato と呼ばれる 4 つの王国が存在した。カリアリ国はそのうちの 1 つで、ほかにはトッレス (Torres), ガッルーラ (Gallura), アルボレア (Arborea) がある。古サルデーニャ語文献には、Giudicato から教会に対する寄進の内容を記録したものが多く見られる。

¹⁰ CV における表記に関する詳細は Guarmerio (1906: 198-199) を参照。

3. 古サルデーニャ語の語末添加母音

古サルデーニャ語の語末添加母音には、2.2. で挙げた性質のほかにも、様々な特徴が観察される。本章では、古サルデーニャ語の語末添加母音の特徴について考察を行なう。

3.1. 単音節語および語末音節アクセント語に付加される語末添加母音

CV すなわち古カンピダーノ方言では語末添加母音が観察される (Guarnerio 1906: 215-217, Wagner 1984: 107)。以下に単音節語および語末音節アクセント語に付加される語末添加母音の具体例を示す。現代カンピダーノ方言と同様、*i* が付加されている。

ki si 'ndi appat proi (< PRŌ) sanctu Jorgi cantu
REL. RIFL. CLIT. have.CONG.PRES.3SG. for St. J. as-much-as
adi durari su mundu (CV: 11)
have.IND.PRES.3SG. last.INF. the world
「世界が続く限り、St. Jorgi のために彼が持っているもの」

その他の例

proi (CV: 6, 11, 12 ecc.), proy (CV: 20) 'for' < PRŌ

illoi (CV: 6ii, 10, 13iii, 14ii, 19), lloi (CV: 2, 7, 9, 11, 13ii, 14xi, 17, 18, 19, 21) 'CLIT.' < ILLOC

すでに述べたように、単音節語および語末音節アクセント語における語末添加母音は、語末音節アクセントを避けようとする性質に従って付加される。よって子音で終わる語に付加される語末添加母音とは異なり、後続語の有無とは無関係であり、どのような環境であっても義務的に付加される。すなわちこれらの語末添加母音は、語の一部として統合されており、本来的な母音と同じ位置付けにあるといえる。

例外的に、語末音節アクセント語であっても語末添加母音が付加されない場合がある。サルデーニャ語では、母音間閉鎖音の消失によって生じた同一母音の連続では縮約が生じ、単母音になる。この変化によって生じた語末音節アクセント語では、語末添加母音は付加されない (Wagner 1984: 26) : *camp. nú 'nude' < NŪDUM, camp. bí 'see' (INF.) < *bidi < VIDĒRE.*

3.2. 子音で終わる語に付加される語末添加母音

3.2.1. 問題となる語形の提示

古サルデーニャ語における、子音で終わる語に付加される語末添加母音には、以下のような例がある。2.2.2. で示した添加母音の音色の規則に従い、*i* が付加されている¹¹。

¹¹ CV では語末添加母音の表記について、現代サルデーニャ語に見られるような規則性は認められない。すなわち、子音で終わる語が文末に位置していても語末添加母音が付加されたり、逆に文末に置かれていても語末添加母音が付加されていないという例が頻繁に見られる。

et positi (< POSUIT) *ella cum totu parççoni sua* (CV: 8)
and donate.PF.3SG. she with all land her
「そして彼女は彼女のすべての土地をもって寄進を行なった」

その他の例

kerfidi (CV: 15) ‘want’ (PF.3SG.) < *kerūit ← QUAESĪVIT¹²
positi (CV: 8) ‘donate’ (PF.3SG.) < POSUIT

しかしながら、例えば以下に示すような、第 2 変化動詞の直説法半過去語尾に付加されている語末添加母音の音色は、2.2.2. で示した規則では説明できない。2.2.2. で示した規則に従えば、直前の音節の母音が e である場合、語末添加母音は i が予想される。しかしながら以下に示す直説法半過去 3 人称単数語尾 *-eda* では a が現れている。

et omnia cantu si pertineda (< PERTENĒBAT) *a icussa domu* (CV: 13)
and every as-much-as RIFL. belong.IND.IMP.3SG. to this house
「そしてこの家に属していたすべてのもの」

その他の例

arreedā (CV: 14, 16) ‘govern’ < *ad + regēbat
bineda (CV: 9, 13, 17) ‘come’ < *benebat ← VENĪBAT¹³
debeda (CV: 13) ‘must’ < DĒBĒBAT
pareda (CV: 17) ‘seem’ < PARĒBAT
pertineda (CV: 11, 13, 14) ‘belong’ < PERTENĒBAT
seedā (CV: 16) ‘sit’ < SEDĒBAT

同様に、直説法半過去 3 人称複数語尾 *-enta* でも、予想される i ではなく a が付加されている。

Et totu custu serbiciu fagenta (< FAC(I)ĒBANT) *fisca adicomō ad su rennu* (CV: 1)
and all this service do.IND.IMP.3PL. until now for the reign
「そしてこれらすべての奉公は今まで彼らが国に対して行っていた」

その他の例

fagenta (CV: 18, 21) ‘make’ < FAC(I)ĒBANT

¹² ラテン語の *QUAERĒRE* の完了形は本来 *s* によって特徴付けられていたが、サルデーニャ語において *u* によって特徴付けられる完了形にとって代わられた。

¹³ ラテン語の *VENIRE* ‘come’ は第 4 変化動詞に属していたが、サルデーニャ語において第 2 変化動詞に移行し、語尾 **-ebāt* を持つに至った。

kerenta (CV: 14) ‘want’ <QUAERĒBANT

ponenta (CV: 13) ‘donate’ <PŌNĒBANT

次節からは、2.2.2. で示した規則では説明できない、古サルデーニャ語における子音で終わる語に付加される語末添加母音について分析を行なう。

3. 2. 2. 先行母音の消失と語末添加母音の関連—アクセント位置の観点から

前節で示した第 2 変化動詞の直説法半過去語尾 3SG. -eda と 3PL. -enta は、それぞれラテン語の -ĒBAT と -ĒBANT に対応する。これらの語尾には母音間の b の消失が見られる。加えて、b の消失によって生じた母音連続 ea に含まれる a の消失が見られる。カンピダーノ方言では、子音の消失によって生じた異なる母音の連続において、アクセントのある母音が保存されアクセントのない母音が消失するという現象が観察される (Virdis 1978: 36-37, Wagner 1984: 85-86) : camp. lóri ‘cereal’ <*laóri <LABŌREM, camp. sóri ‘sweat’ <*suóre <SUDŌREM, camp. póni ‘peacock’ <*paóne <PAVŌNEM. 古カンピダーノ方言では次のような母音の消失の例が確認された : emus (CV: 18) ‘have’ (IND.PRES.1PL.) <*aémus <HABĒMUS.

第 2 変化動詞の直説法半過去語尾における、母音間の b の消失によって生じた母音連続 ea における a の消失は、語末添加母音が付加された形式に限られる。すなわち以下に示すように、語末添加母音を欠く形式では ea は保存されている。

<custas ambas domus iuigi Pedru illas **habeat** (<HABĒBAT) *dadas*
these both house Giudice P. them.ACC. have.IND.IMP.F.3SG. give.PPASS.
sendu in Pluminus ad sanctu Jorgi de Suelli> (CV: 12)
be.GER. in P. to St. J. de S.

『この両方の家は Pedru 王が Pluminus にいた時に St. Jorgi de Suelli に与えた』

その他の例

habeat (CV: 12iv), abeat (CV: 13) ‘have’ <HABĒBAT

habeant (CV: 3) ‘have’ <HABĒBANT

以下ではこのような現象について、アクセント位置と関連付けて考察を行なう。

3SG. -eat に語末添加母音が付加されると、音節数が 1 つ増えてアクセントは前次末音節に置かれることになる。その後、母音連続 ea における a が消失するとアクセントは次末音節に置かれることになる。サルデーニャ語のアクセント規則¹⁴から見れば、次末音節アクセントは許容される。3SG. -eda および 3PL. -enta の成立過程をアクセント位置を明示して

¹⁴ サルデーニャ語は基本的にラテン語のアクセント位置を保存している (Wagner 1984: 15)。従ってここではラテン語のアクセント規則を示す。(1) 語末音節にアクセントが置かれることはなく、2 音節語では次末音節にアクセントが置かれる : HABET /hábet/ ‘have’ (IND.PRES.3SG.), (2) 3 音節以上の語において、次末音節の母音が長ければ、その音節にアクセントがあり、次末音節の母音が短ければ、前次末音節にアクセントがある : FORTŪNĀ /fortú:na/ ‘fortune’, MONĒŌ /móneco:/ ‘advice’ (IND.PRES.1SG.)

示せば、以下のようになる。

3SG. -ĒBAT > -éat > *-éat[a] > *-ét[a] > -éd[a]

3PL. -ĒBANT > -éant > *-éant[a] > -ént[a]

一方、仮に語末添加母音が付加されていない形式で母音の消失が生じると、アクセントは語末音節に置かれることになる。サルデーニャ語では 3.2.2. で示した語など、ごくわずかな例外を除いて語末音節アクセントは存在しない (Wagner 1984: 25)。従って語末添加母音が付加されない形式では母音の消失は生じなかったといえる。言い換えれば、3SG. -eda と 3PL. -enta において語末添加母音は母音連続に含まれる a の消失を条件付ける要素となっている。

上に示した見方を支持する根拠の 1 つとして、第 2 変化動詞の直説法半過去 1 人称単数語尾 -ea がある。

et ca mi pareda pagu custa domestia, de no mi
and because me.DAT. seem.IND.IMPF.3SG. little this land of not me.DAT.
bastari ad fagiri binia cantu bolea (< VOLĒBAM) fairi
be-enough.INF. for make.INF. vineyard as-much-as want.IND.IMPF.1SG. make.INF.
ad sanctu Jorgi (CV: 17)
for St. J.

「そしてこの土地は、St. Jorgi 修道院のために私がぶどう畑を作ろうと欲する分には少なく見えたので」

その他の例

kerea (CV: 17) ‘want’ < QUAERĒBAM

tenea (CV: 16) ‘have’ < TENĒBAM

1SG. -ea はラテン語 -ĒBAM から語末の m と母音間の b の消失によって導かれる。1SG. -ea ではすべての例で母音連続 ea が保存されている。これらの語では次末音節にアクセントが置かれる。ただし母音で終わる語であるので、語末添加母音が付加されることはなく、a の消失は生じない。a が消失すると語末音節アクセント語になるからである (i.e. boléa > *bolé).

3.2.3. 通時的規則としての語末添加母音

前節では、3SG. -eda と 3PL. -enta の語末添加母音 a が母音連続に含まれる a の消失を条件付ける要素となっていることを、アクセント位置との関係を考慮に入れつつ示した。このことから、語末添加母音は a の消失より歴史的に古い段階で付加されていたと推定できる。この推定を裏付けるために本稿では、3SG. -eda と 3PL. -enta に見られる語末添加母

音の音色が a であることに着目する。2.2.2. で述べたように、語末添加母音 a が付加されるのは直前の音節の母音が a の場合のみである。すなわち 3SG. -eda および 3PL. -enta に見られる語末添加母音 a は母音連続 ea がまだ保存されている段階で付加されたといえる。

2.2.2. で述べたように、子音で終わる語に付加される語末添加母音は本来、文末という環境でのみ現れるので、共時的な規則によって付加されているといえる。これに対して 3SG. -eda と 3PL. -enta に見られる語末添加母音は、歴史的に古い段階で付加されたものが語尾の一部に統合されていると捉えられる。言い換えれば、これらの語末添加母音は通時的な規則によって付加されたと解釈することができる。以上のことを考慮に入れると、3SG. -eda および 3PL. -enta の成立過程は以下のように図式化できる。

3SG. -ĒBAT > -eat > -/eat/ + [a] → -/eada/ > -eda

3PL. -ĒBANT > -eant > -/eant/ + [a] → -/eanta/ > -enta

上に挙げた形式のほかにも、通時的規則によって語末添加母音が付加され、母音連続におけるアクセントのない母音が消失している例として、以下の形式が挙げられる (Guarmerio 1906: 216)。

adi (CV: 1, 11ii, 12 ecc.) ‘have’ (IND.PRES.3SG.) < */aedi/ < */aet/ + [i] < HABET

anti (CV: 7, 14, 18ii ecc.) ‘have’ (IND.PRES.3PL.) < */aenti/ < */aent/ + [i] < HABENT

badi (CV: 2vii, 11, 15 ecc.) ‘go’ (IND.PRES.3SG.) < */baidi/ < */bait/ + [i] < VADIT

fudi (CV: 1, 4, 10 ecc.) ‘be’ (PF.3SG.) < */fuidi/ < */fuit/ + [i] < FUIT

これに対して、語末添加母音を欠く形式では母音の消失は生じない。

aet (CV: 1vii, 4, 5 ecc.) < HABET

aent (CV: 1ii) < HABENT

fuit (CV: 5, 9ii, 10) < FUIT

ここまでの議論から、古サルデーニャ語における、子音で終わる語における語末添加母音には、共時的規則によって付加されたが、語尾の一部に統合された結果、通時的規則によって付加されていると解釈できるものがあるといえる。すなわちこれらの語末添加母音は、2.2.2. で示した現代サルデーニャ語の語末添加母音とは異なる性質を持っていると結論付けることができる。

3.3. 類推に基づく、語末添加母音を含む形の一般化

前節では、通時的規則によって付加された語末添加母音が、語尾の一部として統合されていることを示した。本節ではこのような見方を補強する傍証として、語末添加母音を含

む形が 1 つのまとまりとして、類推によってほかの語尾に一般化されている事例を示す。

古カンピダーノ方言の *dari* ‘give’ の完了形 3 人称単数は *dedi* であり、ラテン語 *DEDIT* に由来する。

Et dedibi (< *DEDIT*) *donnu Arzzocu de Lacon a Bera, filia de Basili*
and give.PF.3SG.-CLIT. Mr. A. de L. ACC.¹⁵ B. daughter of B.
Arrasu, ankillla sua peguliari, ad ankillla de cadadie (CV: 4)
A. slave his property to slave of everyday

「そして *Arzzocu de Lacon* 氏は彼の財産である女奴隷 *Basiki Arrasu* の娘である *Bera* を完全隷属の女奴隷に与えた」

その他の例

dedi (CV: 4ii, 8v, 9ii, 11ii, 12, 13ix, 14xvi, 15ii, 16v, 17vii) < *DEDIT*

dedi は母音間の *d* の消失と、語末添加母音 *i* の付加、そしてそれにもなう *t* の有声化、さらに母音連続 *ei* に含まれる *i* の消失によって、ラテン語 *DEDIT* から導くことができる (i.e. *DEDIT* > **deit* > *deiti* > *dedi*)。

dedi における語末添加母音 *i* の直前の音節の母音は *e* であるので、*i* は共時的規則によって付加された可能性もある。しかしながら本稿では上に示したように、語末添加母音 *i* は *ei* がまだ保存されている段階で付加されたと考える。その根拠として、古カンピダーノ方言で書かれた文書である *Carta di caratteri greci*¹⁶ には *δέητι* という形式が観察されることが挙げられる。すなわち、語末添加母音 *i* は通時的規則によって付加されたものであるといえる。

古カンピダーノ方言における第 1 変化動詞の完了形 3 人称単数語尾は、*-edi* である (Guarmerio 1907: 218)。以下にいくつか例を示す。

et issi torredi (← *TORNĀVIT*) *berbu, ...ca* <*Jurgia Cucu non fudi*
and he return.PF.3SG. word that J. C. not be.PF.3SG.
muniaría, antis fudi ankillla de padri miu> (CV: 13)
slave-for-governor but be.PF.3SG. slave of father my

「そして彼は、『*Jurgia Cucu* は王の女奴隷ではなく、私の父の女奴隷であった』という言葉を返した」

¹⁵ *a* は対格を標示する前置詞としても用いられる。本稿ではグロスとして *ACC.* と付す。

¹⁶ *Carta dei caratteri greci* は、カリアリ国の王である *Costantino Salusio* 2 世による、*San Saturno* 教会への寄進を記録した文書である。オリジナルの成立年代は 1081 年から 1089 年前半とされている。テキストはカンピダーノ方言で書かれているが、表記にはギリシャ文字が用いられている。ギリシャ文字の使用は、ビザンツ帝国によるサルデーニャ島の支配の名残といわれている (Blasco Ferrer 2002: 324)。本稿では Blasco Ferrer (2002) の校訂テキストを用いる。

その他の例

bogedi (CV: 17) ‘be liberate’ ← VŌCĀVIT
cambiedi (CV: 9) ‘exchange’ ← CAMBIĀVIT
campaniedi (CV: 14) ‘agree’ ← CAMPANIĀVIT
donedi (CV: 13, 16) ‘give’ ← DŌNĀVIT
iuredi (CV: 13ii) ‘swear’ ← JŪRĀVIT
lassedi (CV: 17) ‘leave’ ← LAXĀVIT
leuedi (CV: 9) ‘deprive’ ← LEVĀVIT
naredi (CV: 17) ‘say’ ← NARRĀVIT
pregedi (CV: 18ii) ‘ask’ ← PRECĀVIT

-edi は対応するラテン語 -ĀVIT から音変化によって導くことはできない。金澤 (2010: 218-219) では、-edi は先に示した dari の完了形 3 人称単数 dedi からの類推によって生じたことを、同様の類推がプロヴァンス語などほかのロマンス諸語にも観察されることを根拠として主張した¹⁷。

上に示した事例では、語末添加母音 i を含む dedi からの類推で、-edi がすべての第 1 変化動詞の完了形 3 人称単数に一般化している。この事實は、語末添加母音 i は類推が起こるよりも古い段階で付加されており、語尾の一部に統合されていることを示す 1 つの根拠となり得る。

このほかにも、語末添加母音が類推によって別の語に広がっていると考えられる事例が存在する。dari の完了形 3 人称複数形は以下の形が見られる。

derunti (CV: 8, 16ii), deruntu (CV: 16) < DEDERUNT

derunti および deruntu は第 2 音節の de の消失と語末添加母音の付加によってラテン語 DEDERUNT から導くことができる。deruntu に含まれる添加母音 u は 2.2.2. で示した規則によって説明可能であり、共時的規則によって付加されていると考えることができる。しかしながら derunti に含まれる語末添加母音 i は 2.2.2. で示した規則では説明できない。i は 3SG dedi に含まれる、語尾の一部として統合された i からの類推によって二次的に得られたものであると推定できる¹⁸。

¹⁷ 例えばプロヴァンス語では、第 1 変化動詞の完了形 3 人称単数語尾 -et は dar ‘give’ の完了形 3 人称単数 det からの類推によるという (Paden 1998: 41-42)。サルデーニャ語の -edi について Guarnerio (1907: 225) や Wagner (1938-1939: 12-13) は、第 3 変化動詞の完了形 3 人称単数語尾 -idi (e.g. kerfidi (CV: 15). 3.2.1. 参照) に含まれる語末添加母音 i からの類推によるものと考えている。このような類推を想定するのであれば、類推が生じる以前に -ĀVIT > *-ait > *-et という変化が生じていたことが前提となる。しかしサルデーニャ語にこのような変化は観察されず、先行研究の見解は妥当とはいえない。詳しくは金澤 (2010: 216-217) を参照。

¹⁸ Guarnerio (1905: 216) も i はほかの動詞からの類推によると述べている。

4. まとめと今後の課題

本研究では、古サルデーニャ語の語末添加母音の性質について考察を行なった。考察の結果、古サルデーニャ語における、子音で終わる語に付加される語末添加母音には、語尾の一部として統合された結果、通時的規則によって付加されているものが存在することを示した。このような性質は、3.1. で見た、義務的な付加によって語の一部に統合されている、単音節語および語末音節アクセント語に付加される語末添加母音と共通しているといえる。これまでの研究では、子音で終わる語に付加される語末添加母音について、2.2.2. で述べた性質は明らかにされていたものの、本研究で示したような特徴について言及されることはなかった。

現代サルデーニャ語には通時的規則によって付加された語末添加母音は存在しない。本稿では、古サルデーニャ語で通時的規則によって付加された語末添加母音が、現代サルデーニャ語において失われる過程については議論することができなかった¹⁹。例えば、現代カンピダーノ方言における *ái* ‘have’ の直説法現在 3 人称単数と 3 人称複数の、語末添加母音が付加された形式はそれぞれ *ađ[a]*, *ant[a]* である。*ađ[a]* と *ant[a]* は /at/ と /ant/ に共時的規則によって語末添加母音 [a] が付加されている。これらの形式に対応する古サルデーニャ語は 3.2.2. で示したように、それぞれ *adi* / *aet* と *anti* / *aent* であるが、現代カンピダーノ方言では *aet* および *aent* の *e* が消失した形式が継承され、通時的規則による語末添加母音をともなう *adi* と *anti* は失われたことになる。一方で Wagner (1984: 106) によると、現代カンピダーノ方言の変種では *ađ[a]*, *ant[a]* と並んで *ađi*, *anti* という形式が観察されるという。以上に挙げた例を中心に、古サルデーニャ語と現代サルデーニャ語における語末添加母音の性質の違いについて、添加母音に関する一般的理論への発展も視野に入れつつ、さらなる考察を進めていくことが今後の課題である。

略号一覧

ACC. = 対格, camp. = カンピダーノ方言, CLIT. = クリティック, CONG. = 接続法, DAT. = 与格, GER. = 動名詞, IMPF. = 半過去, IND. = 直説法, INF. = 不定詞, lat. = ラテン語, log. = ログドローロ方言, PF. = 完了形, PL. = 複数, PPASS. = 過去分詞, PRES. = 現在, REL. = 関係詞, RIFL. = 再帰代名詞, SG. = 単数, 1, 2, 3 = 人称

参考文献

- 金澤 雄介 (2009) 「サルジニア語」, 梶 茂樹・中島 由美・林 徹 (編) 『事典 世界のことば 141』, 424-427, 大修館書店。
———. (2010) 「サルデーニャ語動詞形態論の通時的研究」, 京都大学博士論文。

¹⁹ 現代カンピダーノ方言の第 2 変化動詞の直説法半過去では、添加母音が付加された *-cda*, *-enta* は継承されておらず、別の由来の語尾にとって代わられている。また第 1 変化動詞の完了形も失われている。従ってこれらの語形における語末添加母音については問題とならない。

- 長神 悟 (1998) 「サルデーニャ語」, 亀井 孝・河野 六郎・千野 栄一 (編著) 『言語学大辞典』第 2 卷, 104-115, 三省堂.
- Atzori, M. T. (1953) *Glossario di sardo antico* (GSA). Parma: Scuola tipografica benedettina.
- Besta, E. / P. E. Guarnerio. (1905) *Carta de Logu de Arborea. Testo con prefazioni illustrative*. Sassari: Dessì.
- Blasco Ferrer, E. (1984) *Storia linguistica della Sardegna*. Tübingen: Max Niemeyer.
- . (2002) “La carta sarda in caratteri greci del secolo XI. Revisione testuale e storico-linguistica” in *Revue de Linguistique Romane* LXVI. 321-365.
- Guarnerio, P. E. (1905) “La lingua della <Carta de Logu> secondo il manoscritto di Cagliari” in Besta, E. / P. E. Guarnerio. *Carta de Logu de Arborea. Testo con prefazioni illustrative*. Sassari: Dessì. 1-82.
- . (1906) “L’antico campidanese dei sec. XI-XIII secondo <Le antiche carte volgari dell’archivio arcivescovile di Cagliari>” in *Studj romanzi* IV. 189-259.
- . (1907) “Reliquie sarde del Condizionale perifrastico col Perfetto di *habere*” in *Romanische Forschungen* XXIII. 217-222.
- Paden, W. D. (1998) *An Introduction to Old Occitan*. New York: The Modern Language Association of America.
- Solmi, A. (1905) “Le carte volgari dell’archivio arcivescovile di Cagliari. Testi Campidanesi dei secoli XI=XIII.” in *Archivio storico italiano* V: 35. 277-330.
- Virdis, M. 1978. *Fonetica del dialetto sardo campidanese*. Cagliari: Edizioni della Torre.
- Wagner, M. L. (1938-1939) “Flessione nominale e verbale del sardo antico e moderno” in *Italia dialettale* XIV. 93-170, XV. 1-30.
- . (1943). “La questione del posto da assegnare al gallurese e al sassarese” in *Cultura Neolatina* III. 243-267.
- . (1960-1964). *Dizionario etimologico sardo* (DES). Heidelberg: Carl Winter.
- . (1984). *Fonetica storica del sardo. Introduzione, traduzione, e appendice di Giulio Paulis*. Cagliari: Gianni Trois. (*Historische Lautlehre des Sardischen*. Halle: Max Niemeyer 1941. の Paulis による翻訳)